

学園の将来と学生実態からキャンパス課題を考える

～立命館の経験に学び、未来を語る～新キャンパスをどうするのか～

立命館の経験

- ① 従来、教学改革の方向性、学園の目指すべき方向性を全学で共有することは、長期計画の根幹であり、学生をも含め全学協や学振懇で確認するのが通例であった。

60年代：教学の「現代化・総合化・共同化」－経営学部、産業社会学部の設置

70年代：衣笠一拠点化 <sup>1980 法政大学</sup> <sup>63</sup> <sup>67</sup> <sup>1988</sup>

80年代：「国際化・情報化・開放化」－情報工学科、国際関係学部の設置

90年代：理工学教学の拡充、文理融合キャンパスの創造－BKC 移転・拡充  
真の国際大学の創造（国家的事業として）－APU 設置

- ② 「現代化・総合化・共同化」も「国際化・情報化・開放化」も単に学部学科新設のスローガンであったわけではなく、既存学部の教学のあり方を見つめなおす作業をも含みこむスローガンとして打ち立てられた。新学部・新学科の設立は、全学的な目標を具現するものと見なされ、全学的な共同作業を伴うものであった。

- ③ 70年代から80年代を通じて、文部省の大学政策の基本は「抑制」であった。大学設置基準の遵守を迫り、京都を含む大都市圏では「工場等制限地域法」が適用され、学生総数の増加が厳しくチェックされた。従って、既存学部の定員振り替えによって新学部の設置を目指すのが基本であり、学生の純増を求めるなら「制限地域」を離れる必要があった。理工の情報工学科と国際関係学部は、こうした条件下に設置されたものであるから、全学的支持なしには不可能な事業であった。

- ④ 90年代に入り、大学設置基準が大綱化され、各大学の独自性や個性が尊重されることになると、18歳人口の減少期に入ったにもかかわらず、私立大学では学部学科の増設が相次いだ。文部行政上、国立大学は厳しく管理するが、私立大学は自由競争に任せて、自然淘汰に委ねるという方策が採用され、各私大は生き残りをかけて学部学科の増設に乗り出したのである。その結果、勝ち進む大学と沈みゆく大学という二極分解が進行し始め、勝ち進む経営手腕を評価する風潮が私大連盟に広がり、大学論なき私学経営論が幅をきかすようになった。立命館大学は、東のHやW大学とともに、その先頭を走る大学として見られるようになった。 <sup>法政大学</sup>

- ⑤ しかし、立命では、90年代においてもまた2000年代当初においても、全学合意が何よりも尊重され、全構成員自治に基づく全学協の存在が速やかな意思決定を可能にする根幹だと見なされていた。少なくとも2003年の全学協まではそうであった。このやり方が軽んじられたのは、それ以降の出来事なのである。

- ⑥ なお、注意すべきは、80年代以降の「開放化」の動きが地域との連携や大学間連携を促進したことである。大学の街京都というスローガンが打ち出され、大学コンソ

ーシアム京都（その前身の京都・大学センター）が生み出され、立命館大学もまた同志社や龍谷、大谷大学等とともに、その事業を支えることになった。この点も銘記すべきである。個別大学間の競争志向を緩和し、連携や協働の道を選ばせる可能性が、ここにはあった。

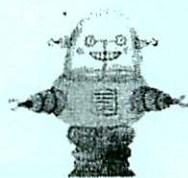
現在提起されている新キャンパス問題について

- ① それが、グランドデザインなき新キャンパス設置構想であることは明らかである。理事会在が提起している茨木の土地購入問題については、その土地をどのように使用するかさえ全く見通しが示されていない点では、キャンパス問題と呼ぶことさえ憚られる。目下のところ単なる土地購入問題であり、しかも大義なき土地購入問題なのである。そして、その購入費が結局のところ学生の納付金に還元されざるを得ない私学の財政構造を考えると、学生にまた学生の父母にどのような説明が可能なのか、理解に苦しむ。可能なのは、土地を購入しておけば、後から何かと役立つだろうという漠然たる説明でしかないであろう。
- ② 総長は、組合との懇談会でグランドデザインがないことを認めつつ、今までとは違う新しい計画作りだと強弁している。各職場や教授会等から出される個別の論点を積み上げて、これからグランドデザインを描けばいいと言い切っている。総長の考えでは、教育と研究の質の向上を図ろうとすると、既存キャンパスは狭隘であるから、キャンパス整備＝キャンパス創造を最優先課題にしなければならない、ということなのであろう。だが、既存キャンパス、とりわけ衣笠キャンパスが狭隘であるのなら、その狭隘さを解消するためには衣笠キャンパスの拡充が必要であるし、それが困難な場合には既存学部の移転や縮小をも視野に入れた将来構想が必要になる。だが、そのような構想は提示されず、衣笠に関しては政策科学部の移転可能性が取り沙汰されたにとどまる。BKC にある経営学部の移転可能性は衣笠の混雑解消とは関わりない話であり、BKC が経営学部の移転を必要とするほどに手狭になったという話は、聞いたことがない。しかも、両学部の移転話は学部教授会の承認を得たものでもなく、ましてや全学、全構成員の了解を得た将来構想になってはいない。
- ③ 従って、再度いえば、今回の新キャンパス問題は、グランドデザインを欠いた単なる土地購入問題に堕している。これを、なお推進しようとするのは、何か他の隠された意図があるのではないかと疑われよう。速やかに撤回し、正課・課外を含む教学の質の向上に必要な施策を具体的に打ち出すべきである。衣笠キャンパスの狭隘問題もその中に位置づけ、中・長期的な解決の方策を提示する必要があることは、いうまでもない。



# 未来フォーラム

第8号



編集：未来フォーラム事務局  
発行：立命館大学教職員組合  
2010年10月25日発行



明日  
開催!!

## 第3回『未来フォーラム』を開催します!!

立命館未来フォーラム・立命館大学教職員組合 主催

「学園の将来と学生実態からキャンパス課題を考える  
～立命館の経験に学び、未来を語る 新キャンパスをどうするのか～」

立命館では現在、各職場にて様々な角度で新キャンパス構想が議論されていますが、特に若い方・職歴の浅い方からは、これまでの立命館の大きな事業の進め方について、どのように論点や課題を検討してきたのかということについて学びたいという意見が聞かれます。

今回は、これまで学園の事業に中心的に関わってこられた方にご報告いただき、どのように全学で課題を深めてきたのかについて学び、今後の議論に活かしていけるようにしたいと思います。あわせて、学生部副部長にご参加いただき、課外・自主活動、学生生活の現状と今後の条件整備について語っていただき、キャンパス・デザインを議論する機会にしていきたいと考えています。多くの方のご参加をお待ちしています。

【日時】 2010年10月26日(火) 19:00～

【会場】 衣笠 至徳館 304東西(メイン会場)  
BKC コア大会議室  
朱雀 B01会議室



### 【報告】

佐々木 嬉代三さん (本学名誉教授・元副総長)  
川口 潔さん (入学センター次長・元調査企画室)  
平岡 和久さん (政策科学部教授・学生部副部長)

### 【司会】

宇野木 洋：未来フォーラム座長 (文学部教授)

※是非とも多くの方のご参加をいただき、今後の立命館について、活発な意見交換が出来ればと思います。

みなさまのご参加をお待ちしております!!

※参加ご希望の方は、組合書記局 (内戦：511-2780) もしくは (rits\_union@yahoo.co.jp) までご連絡ください。